



静中・静高関東同窓会
会報 第44号
平成9年12月24日発行
編集人 上杉重吉

三木卓弥次郎兵衛先輩

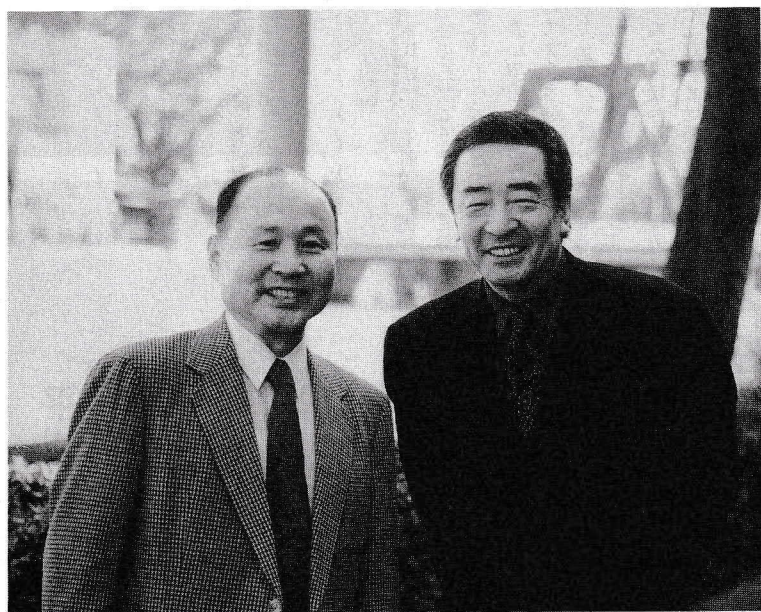
75期 村松友視

詩人にして芥川賞作家、三木卓さんの本名は富田三樹……そしてこの「富田くん」は私にとって、城内中学、静岡高校の先輩だった。「富田くん」という先輩がいて、文藝的に並外れた才能を発揮していることは、私たち後輩の中でも有名だった。「富田くん」は凄いらしいんだよ……文芸部にも入っていなかった私は、かつてあこがれのようにその噂を聞いていたものだった。私は、高校へ入った頃から、いわばぼんやりとした時を過して、「富田くん」という先輩は凄いなと思いつつも、そこへ近づこうとする努力など何もしていないで高校時代をやり過した。

時が経ち、私は中央公論社へ入

社して編集者となり、三木卓という名を知った。そして、『海』という文芸誌へ配属されてから、その三木卓さんに直接お目にかかり、「ほかあ君の先輩だよ」と言われた。そのときは三木さんが『東京午前三時』でH氏賞を受賞、『わがギリランド』で高見順賞を受賞し、『襖』で芥川賞を受賞してから、かなりの時間がたっていて、私の側からはもちろん三木卓＝富田三樹＝先輩というのが知っていた。わざと静岡弁で、気楽に声をかけられて、私はすっかりうれしくなり、すぐになつて今日に到っているわけであります。

『海』の時代には、三木さんの長編小説を実現させようと、助走の



<写真提供…榊まくら春秋社>

部分ではかなり取り組んだが、その作品はついに「幻の長編」にな

ってしまった。大作『野いばらの衣』を書かれた頃の三木さんの作家的意識が、そのときの素材を性急に書くことにブレイキをかけていたのかもしれない。その素材はいまも「幻の素材」として三木さんの頭にあるはずで、いずれふさわしい時を得て作品として生み出されるのかもしれない。

は中央公論を辞め、物書きとなった。こういうことで縁が切れるケースも多いのだが、三木さんはさらに親切に、先輩、後輩として親しく私とつき合ってくれた。私にとって三木さんは、城中、静高、そして小説家の先輩という存在となつたわけで、この図柄は永遠の逃げ水みたいに変えることがない。私はこの図柄を贅沢なものだと思っている。

大体において、ある作家の担当者が作家となつた場合、お互いに複雑な気分が入り混り、しっくりした関係が戻らないケースが多いのだ。私の場合も例外でなく、何となく疎遠になってしまった相手も何人かいる。だが、かつての担当者であった私と、ごく自然につき合ってくれる人も、また何人かいる。そんなケースでは、私にもまたかつての担当者感覚が心地よくよみがえるというわけで、三木さんにもそんな感じにつき合わせていただいている。

そして、三木さんとの交流においては、やはり駿河人同士というワクを外しては考えられないような気がするのだ。静岡的気分というのはたしかにあつて、何かに対する反発や不満を口走るとき、三木さんも私も静岡弁で啖呵を切っ

ていることに気づくことがある。「しょんないなあ、あいつも」「それん気に入らないんだよ」「黙ってりゃあええだよ」、といったぐあいである。

その上私は、近ごろは全国の皮膚科の病院の待合室に置いてある季刊「皮フの手帖」という雑誌の取材の中で、三木さんと共に全国の色街探訪みたいな旅をつづけている。三木さんが弥次さん、私が喜多さんという役づくりの「弥次喜多道中」だが、弥次喜多もまた駿河ビーブルであることを思うと面白い。「色街紀行藤栗毛」と銘打ったこの旅が、すでに何年もつづいている。

私は、その旅の中で三木さんの意外な部分や、あらためて感じる懐の深さを感じることができた。だから、これは有難い旅ということになる。三木さんは、しばらく前に大病を患われたが、そこから復帰して何となく新しい一面が加わったという気がする。

詩人の鋭利な刃物と小説家としての太刀筋、あるいは絹針のごとき批評眼に加えて、駿河人の上質な「軽み」がふわりと三木さんを包みはじめたように見えるのだ。こりゃあ先輩、鬼に金棒ですぜ、

(作家)

とう！ 二つ を二つ で報 おめ 吉

●三木卓著『路地』(講談社刊)
第33回谷崎潤一郎賞(中央公論社主催)を受賞。
△授賞式：十月十七日
●村松友規著『鎌倉のおばさん』(新潮社刊)
第52回泉鏡花文学賞(金沢市主催)を受賞。
△授賞式：十一月十二日

▽村松友規氏の「山川の兄弟」を会報41号に掲載いたしましたところ、たいへん好評を博しました。今号でも、体文協ニュース「とも」の「駿河ビーブル物語」(その三十)に載った本文を、村松氏・佐野つとむ氏のご了承を得て掲載せし読後感などお寄せください。

なお、三木卓氏は安東小・城内中・静高(70期)から、早稲田大学第一文学部露文科を卒業。
▽第33回谷崎潤一郎賞の授賞式で三木卓氏は、

「いま生きてるのは私の人生の別冊付録——長く生きるほどトクをする、おまけの時間だと思っております……」
と、あいさつして会場の喝采を浴びた。

三木氏は二年前、渋谷の街頭で急性の心筋こうそくに見舞われ心臓にバイパスを通す手術を受けた。長い療養生活を経て回復後、初めて完成させた連作短編集「路地」で念願の受賞となった。

「うれしい。感激です」と、すっかり丸みの戻ったほおを緩めた。だが、「おまけの時間」を悠々自適にすごすつもりはないと次のように語る。

「土星にも探査機が飛ぶ時代。ぼくの命の乾電池の耐用時間が来る日まで、人生の探査機を方々に飛ばして、リポートを送り続けることができたなら、それが一番の喜びです。受賞を足場にしてみっとがんばらなければと思っています」

平成九年度(第23回)総会報告

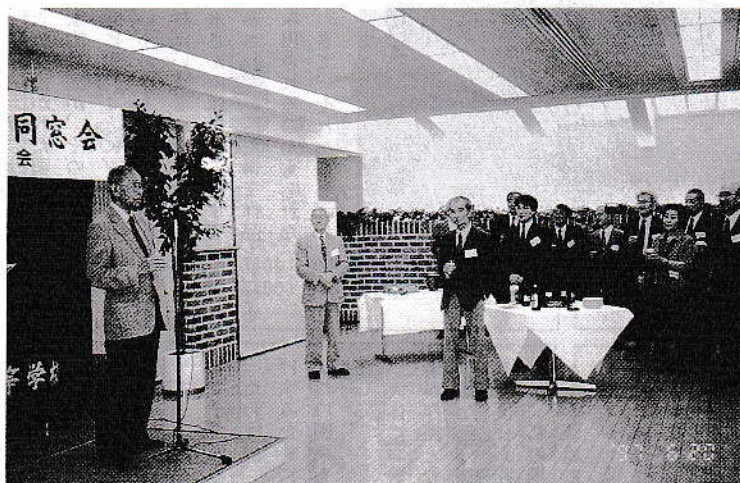
六月二十日(金)、約五十年ぶりの六月の台風本土上陸の日に関東同窓会の総会が行なわれました。午前中から暴風雨が東京を見舞い、事務局へは、午前中から欠席の電話や、問い合わせの電話が鳴りっぱなしでした。雨天決行、あと

ました。

総会は、まず校歌を意気高らかに斉唱して始まりました。

大石巖関東同窓会会長(53期)より、同窓会運営組織の若返りへの提案があり、今後の総会の新企画や、インターネットの活用等も含め、役員会や幹事会で柔軟な姿勢で検討してゆく旨の挨拶がありました。

続いて母校校長代理の北條駿教頭と角替弘志同窓会副会長より母校の現状報告や、後輩



乾杯の、は、米寿の最長老古江誠一氏(43期)

たちの活躍の様子等の報告がありました。

議事に入り、平成八年度事業報告、決算及び監査報告、平成九年度事業計画並びに予算案が、各々承認・可決されました。

懇親会は最長老の吉江誠一氏(43期)の首頭による乾杯で始まり、例年より人数が少ない分、世

代を越え、より親密な実り多い歓談が行なわれました。

締めくくりは、校歌を合唱し来年の再会を約して幕を閉じました。(87期 薬科名雄)

総会のあと、頂戴したお便りの中から、その抜萃を次に紹介——

●当日は台風の影響で出席者は少

なかったが、そのため、かえってじっくりと静中の雰囲気ひたることができ、テーブルにいられた大石会長からじかにお話を伺えたことなど大変良かったと思っております。(60期 石関忠雄)

●大石会長などから有意義かつ示唆に富むお話を数々お伺いし、実に楽しく充実した一日でした。

なかつたが、そのため、かえってじっくりと静中の雰囲気ひたることができ、テーブルにいられた大石会長からじかにお話を伺えたことなど大変良かったと思っております。(60期 石関忠雄)

●総会には娘ともどもお世話になりました。ここ二年、いくつかの支部の総会にも出席させてもらいましたが、関東同窓会と同じ悩みを持っていくように思いました。若者を呼び込むには高校生の時から接点をつくる工夫が必要かもしれません。(76期 北條 駿)

●総会には娘ともどもお世話になりました。ここ二年、いくつかの支部の総会にも出席させてもらいましたが、関東同窓会と同じ悩みを持っていくように思いました。若者を呼び込むには高校生の時から接点をつくる工夫が必要かもしれません。(76期 北條 駿)

●総会には娘ともどもお世話になりました。ここ二年、いくつかの支部の総会にも出席させてもらいましたが、関東同窓会と同じ悩みを持っていくように思いました。若者を呼び込むには高校生の時から接点をつくる工夫が必要かもしれません。(76期 北條 駿)

その後の同窓会活動
(平成9年5月～11月)

◇役員会兼若手幹事会

5月8日(木)

出席者：9名

総会をはじめ運営等を協議。

◇幹事会

5月22日(木)

出席者：28名

会報43号発送依頼。報告、協議。

◇第15回印高会ゴルフ会

6月13日(金)

箱根カントリー倶楽部

参加者：17名

優勝：石間啓一(77期)

2位：富田駿介(76期)

3位：松永秀夫(77期)

(同じ組で独占は珍事！)

◇役員会

6月17日(火)

出席者：9名

総会の諸準備など

◇第23回総会

6月20日(金)△報告は別掲▽

◇平成9年度定時総会

11月24日(月)

ホテル・センチュリー静岡

奥沢副会長出席



写真右：静岡から参会の角替弘志副会長(70期)と北条駿教頭(76期)。下：美味に舌つづみ、話のはずむ懇親会会場



同 期 会 など

五 一 期

われわれ五一期生の中で関東地区に在住している者が平成9年4月10日に集まった。

会場はJR四谷駅前のスクワール麹町である。この会場は四谷消防署のとなりで、消防署の管理する多目的会館である。

JRの駅から近しい、エレベーターが使用出来る上に洋室で椅子に腰掛けられる。それに会館の職員が親切で感じがよい。

総勢13名の中で、静岡から参加したのは狩野安彦君と鈴木義一君の2人である。東京会の常連である飯田鉄雄君と下山富太郎君が亡くなり淋しい。久しぶりの出席は鈴木忠雄君である。今度寺尾利男君に代わって幹事に推薦された広瀬毅君の名司会振りで会合が進め

られた。

病後と称しているが元気そうに見える永井五一郎君は五年前に肺ガンの手術をしたが、その後再発し手術後四年を経過した。糖尿病もあるがウイスキー1瓶を5日で

飲んでいるとのこと。

闘病中の話になると出席者の間で話題に事欠かないが、出席者の中で一番元気なのは司会者の広瀬毅君だ。ボケ防止に趣味、交友、ゴルフ等を心掛けており、町内会の世話をしながら、暇を見て自然を愛し歴史探訪もしているとのこと。

当日の出席者は、大富部国男、狩野安彦、佐伯正剛、鈴木義一、鈴木忠男、高橋達郎、玉越俊一、永井五一郎、難波悦朗、林盛次、原崎郁平、広瀬毅、渡辺功。

(原崎郁平)

五 三 期

今年の同期会は四月十日焼津グランドホテルで年次総会を行なった。参加者は、市川(牧野)・小嶋・佐野(徳)・司馬・志田・清水(知)・芹沢・園田・中村・同夫人・仲野・長阪・新村・福地・同夫人・堀野(伴野)・松永(脩)・松永(小田)・月見里の十九名で、例年より稍少ないが小人数は又それなりに楽しい会になった。

焼津はもう何回目かなので集合も気楽に、予定通り午後六時例のローマ写真館の記念撮影で開会。月見里の司会で先ず物故諸兄の霊に黙祷、今年は小宮左一郎君が新

たに加わった。中村君の議長で議事に入り、業務報告で村手君と連絡がついた事等のニュースがあった。芹沢君から会計報告、新村君から監査報告があつて議事を終り、小嶋君の音頭で乾杯、懇親の宴に入った。

今年は大半が喜寿を迎えるわけだが、流石大戦生残りの諸兄は和やかな中にも元気で、話も酒も弾む。松永君の「遷都論」、園田君の「バリ移住撈揆」等もあり、興は益々盛んであつたが、定刻八時半校歌を斉唱してお開きとなった。

翌日は朝食後ホテルのマイクロバスで県立美術館見学。有度山の北側の中腹、広い緑地に残んの桜も仲々な所に近代的美術館がある。ロダンやザコメティが解らなくても実に良い雰囲気になる事が出来る場所である。

両替町あなごやで鰻重とビール少々、御機嫌で解散した。楽しい二日間、幹事さんに感謝します。

(月見里得知郎)

五 五 期

不安定な秋空の合い間を狙ったようなまずまずの晴天になった十月三日、五五期の同期会がいつもの割烹「山宮」で開催された。

この店のはかつて仲間の一部が利用していた縁で何となく統一して三十数年、その割に女将は老けないなどと言いつながら集まったのは相変らずの面々六名。首都圏在住同期生三十二名のうち、旅行その他で都合のつかない若千名を除く大半が健康上の理由(出欠回答ハガキの近況報告)とはやむを得ない結果というべきであらう。

早速宴に入つて話題といえはこれれも相変らずで、故郷の思い出と現状。恩師・旧友の思い出とその後の消息。戦時中の思い出と現代世相。酔いが回れば声高になるのは元氣な証拠か、せめてもの自己主張か。あの頃死んだヤツ等は可哀そうだという声と、いや今みたいな時代を知らなくて仕合わせだったとか。いずれも喜寿に近い——ということとは平均寿命(男子)に近い——連中の繰り言が延々と続くのでありました。

当日の出席者は宗 四朗、戸塚正五、辻 弘、長沢栄一、法月重雄、日比光明。(日比光明)



五六期

平成九年の関東地区同期会は、十月二十日(月)午後三時から三時間、公務員共済のホテル東京で開かれた。

出席者は、石塚由雄、大野日佐太、奥野進、北村甫、清水逸郎、杉本正也、戸田栄、西脇光夫、萩原達雄、萩原文平、牧大勝三、松田一郎の十二名。

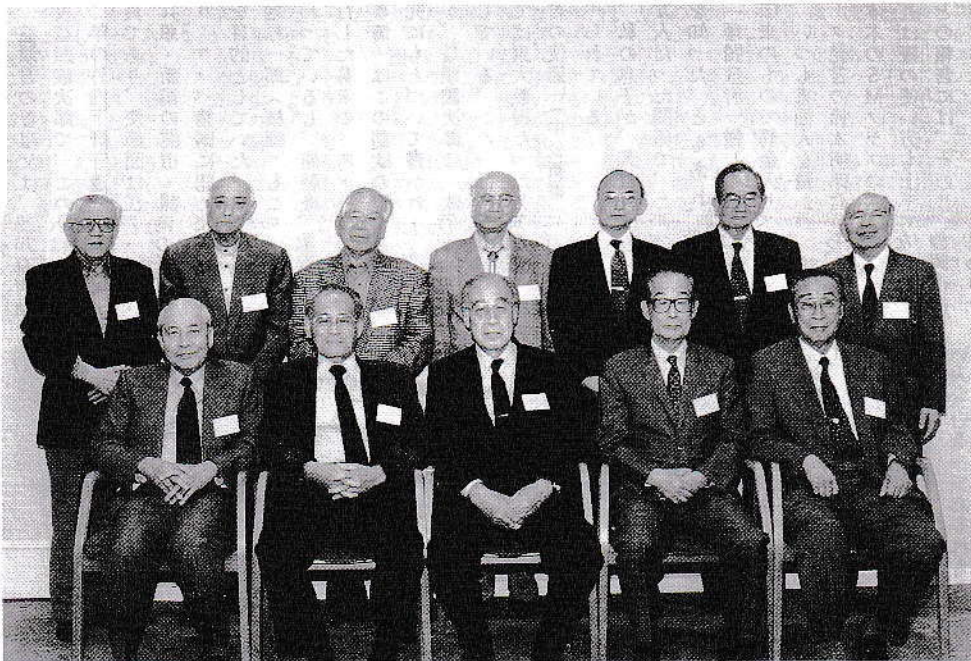
初めにこの八月に亡くなられた高橋四郎君とすでに亡くなられている多くの級友のご冥福を祈って黙とうをささげた同期の中では最も元気だった高橋君の死は大きなショックであった。

事務連絡に続いて、萩原達雄君の音頭で一同の健康を祈念して乾杯し、懇談に入った。今回は、文化と教育の専門家である北村君と西脇君の二人が久しぶりに出席したので、この方面の話に花が咲いた。また、このところの不況に関連して出た多くの質問に経済人である杉本君にいろいろと答えてもらうことができた。次の機会にもこの続きをぜひ聞きたいものである。

話題は次から次へとわき出て同期会ならではのまことに貴重なひとときであった。今年から三時間

に延長したが、それでもあつという間に終ってしまった。最後に松田君に写真を撮ってもらった。午後三時からの会合は時間がどうも中途半端であるということ、で、来年は正午からの三時間にすることを約して散会した。

(清水逸郎)



六四期

「七夕の会」

七夕(たなばた)の会とは、女学校のクラス会ではない。七月七日、天の川に隔てられた彦星と織姫が、年に一度会うという伝説にちなんで、64期首都圏在住者が、七夕の日、一堂に会して談論風発の会を催すのである。

この会は、弁護士を開業してまだ日の浅かった名波倉四郎君が音頭をとり、野澤正憲君・岩本吉雄君の賛同と協力を得て、静中64期京浜地区の会として、昭和三十三年七月七日、新宿聚楽で発足した。爾来約四十年、場所は変わっても連綿として続いている。

最初は、酒食を共にしながらの「近況報告会」といった普通のクラス会の形式をとっていたのを、「息子・娘の伴侶を求める。」「最近の若者を罵倒する。」「私の趣味」「私の健康法」「世相から感ずること」等、テーマを決めての意見発表会としたら、これが大変な好評を呼び、熱気むんむんの会となっている。

名波幹事長から「口下手の人も多い様なので、渡辺君から各自についてユーモア溢るる紹介をして和やかな愉快な発言を引き出して

呉れ。」という注文で、「サーカスはビエロ、芝居狂言も狂言師で決まる様に、64京浜会も司会者で決まる。」なんて、調子に乗って司会者の大役を引き受けたら最近では論客多く、「お前は引っこんでいろ。」という顔色ない始末である。「会費以上に足が出ても、三人幹事に面倒をみて戴くのは心苦しい。是非不足分は割勘にして呉れ。」と言う動議が出た時である。吉井君、立ちあがり「水は高きより低きに流れるのは、自然の理である。幹事が会費以外一切費用は要らないと言っている。ご好意に大いに甘えようではないか。本音を言えば、年金生活者にとって八千円の会費は、大変な苦痛である。」と迷演説を垂れ、動議は忽ち却下され、幹事にオンブにダッコである。

現在はJ.R田町駅芝浦口の酒亭「道灌かがり火」で行われているが、店の人が「年令の割には沢山呑むので驚いている。」と言っているから、馬食はないが、鯨飲の方の様である。

この会には、昭和18年入学はしたものの、途中、疎開等で他校へ転校した者も、逆に、朝鮮・満洲等の外地からの転入者もいる裾野の広い会である。電車に飛び込み

自殺という悲惨な最期を遂げた静岡商業の好投手大原君も、「こんな有益な会はない。」と言って、死ぬ年まで毎年欠かさず出席していた。69期のM嬢の様に「落語の会より面白い。毎年は非出席させて。」という特別会員もいる。

出身地が静岡市という土地柄、七夕の会員は、徳川慶喜駿府移封の際、江戸から随伴した旗本御家人の子孫が多い。靖国神社問題が世間を騒がしている或る年、七夕の会で益頭尚文君立ちあがって、「皆さん靖国神社に祭られている軍人軍属は、日清・日露の戦役以来の戦死者ではなく、鳥羽伏見の戦以来の薩長土肥の戦死者からという事実を知っていますか。」と問いかけた。「戦乱に倒れた日本国民」と政府は言っても、北越戦争の河合継之助や会津の戦の白虎隊員は祭られていない。いわんや、戦災で死亡した人は軍人でないとやって祭っていない。その代わり東条英機や土肥原・松井と言った東京裁判の戦犯者は祭っている。

靖国神社は、藩閥政府に代表される天皇制護持体制の仕掛けであるし、薩長土肥の戦死者からという事実から、靖国の矛盾と欺瞞は露呈されている。趣旨の発言は、末だ私の脳裏から離れてはいない。

益頭君の曾祖父は、徳川幕府諸役益頭駿次郎で、この人は一八六二年の竹内下野守遣欧使節団の一員であり、使節団は江戸・大阪・兵庫・新潟の開市・開港の延期をヨーロッパ諸国に認めさせることを目的としていた。福沢諭吉・福地源一郎(桜痴)もこの一行に加わっているし、帰朝後、福沢が刊行した幕末のベストセラー「西洋事情」はこの訪欧の際の見聞と研究にもとづいて書かれたものだが、益頭駿次郎は「欧行記」を残している。この一行の業績については東大教授だった芳賀徹著「大君の使節」(中公新書)に詳しく述べられている。

私の息子が、芳賀先生の子息と友人だった関係で、この本の存在を知った。ともあれ、益頭君の「藩閥政府」憎しの精神は、父祖伝来のもので筋金入りである。

いつも鬼面人を驚かす、のユニーク発言の鈴木明郎君から、「六本木のSMクラブの常連で、最近はお鞭の使い方も上手になった」との報告には、その昔、静岡市内の女学生にその人ありと知られた軟派のA君、東京の花柳界にその名を轟かしたB君、夜の銀座の帝王C君も、いまや前立腺故障で、性人も聖人となってしまった現実



在、ショックで口もきけない有様である。

「同期会なんて所詮『田舎中学』の馬鹿たちが集って、昔話に花を咲かせ傷を舐め合う『後向き』の会」だ。と言って、絶対出席しない人もいる。まあそれも各自の自由でよろしいでしょう。しかし私に言わせれば「小さい小さい、頑張ったつてもうあと何年生きられるか。肩肘張らないでリラックス



して自然に生きよう。たまには童心に返って、昔のガキ達と引きり合えるのも一興である。」

私達は戦争・戦後ただ生きるために一生懸命働いてきた。気がついた時は、リストラで会社を追われ、女房子供も冷たい顔で離れている。こんな時、「七夕の会」へ出席して、思う存分政見発表する。またオリジナルなユニークな友人の話が聞ける。楽しいかな人

生である。

それにしても、毎年会員があの世に旅立っていく報を聞くのが一番淋しい。「静岡の会はつまらないから出席したくない。東京の会で渡辺節の司会を聞くのは最高の楽しみ。」とヨイショしてくれ、毎年糖尿病の持病を押して新幹線で上京してくれた山下啓也君も先日亡くなったという。ご冥福を祈ります。

「七夕の会」が四十年近くも続いた最大の原因は、幹事が持ち廻わりでなく、固定の永久幹事だったからだと思う。私もいろいろの同窓会、クラス会に関係してきたが、幹事が持ち廻わりだと、多忙と転勤等の原因で、いつのまにか消滅してしまうか中断してしまう。その点わが「七夕の会」は三人幹事が、物心ともに奉仕してくれるので、大磐石である。

十年ほど前になりますか。原田君が死亡した時弔問した増田政雄君に奥様から、「主人はボールペアリングの会社を経営していたが七夕の会へ出席するのを生甲斐にしていました。会に出席して、皆様の奮闘ぶりを聞き、『皆一生懸命生きていく』というのが口癖でした。」原田君は喉頭癌を病み言葉も失っても、「皆のご意見を聞くだけでいい。」と言って会合の隅の席に坐っていた。「幹事さんに感謝申します。」原田君の奥様の言葉は、全会員を代表するものとして、改めて名波・野澤・岩本の三君に呈します。

七月七日は七夕の日であるが、昭和十二年、私達が小学校へ入学して間もなくのこの日、蘆溝橋事件が起こり、これが発端となって

日中戦争・太平洋戦争と拡大していった因縁の日でもある。平和の有難味を噛みしめながら、次の七夕の会が今から楽しみである。

(渡辺素夫)

◎26回ゴルフ大会

十月十六日、晴。例年通り伊豆大仁カントリー倶楽部にて開催。いつもより欠席者が多かったが、集りし面々は、気がねなく、一日を楽しめるのが何よりの妙薬と東京・静岡より参集した。

会が始まってから十五年間、一度も優勝はおろか二位にも入ったことのない岩本吉雄君を何とか優勝させたいと思い、本人も今回は何とかと午後は48のスコアで廻ったが、川口実君と精進著しい神谷武男君のデッドヒートに一打及ばず、残念ながら三位に終り桶を手に出られなかった。栄えある奥さん孝行賞は山本和彦君。

この人の漫談を聞かないと帰れないと発言あり、渡辺素夫君の熱弁で一同笑いのうちに閉会。夕暮れの中、東西に別れた。参加者は右の五名のほか渡辺宏一、鈴木高保、伊藤剛、小沢義郎、漆畑茂、大石次男、佐野旭、時田勝博、新井彰、塚本光彦、石原良昭、野澤正憲。

(野澤正憲)

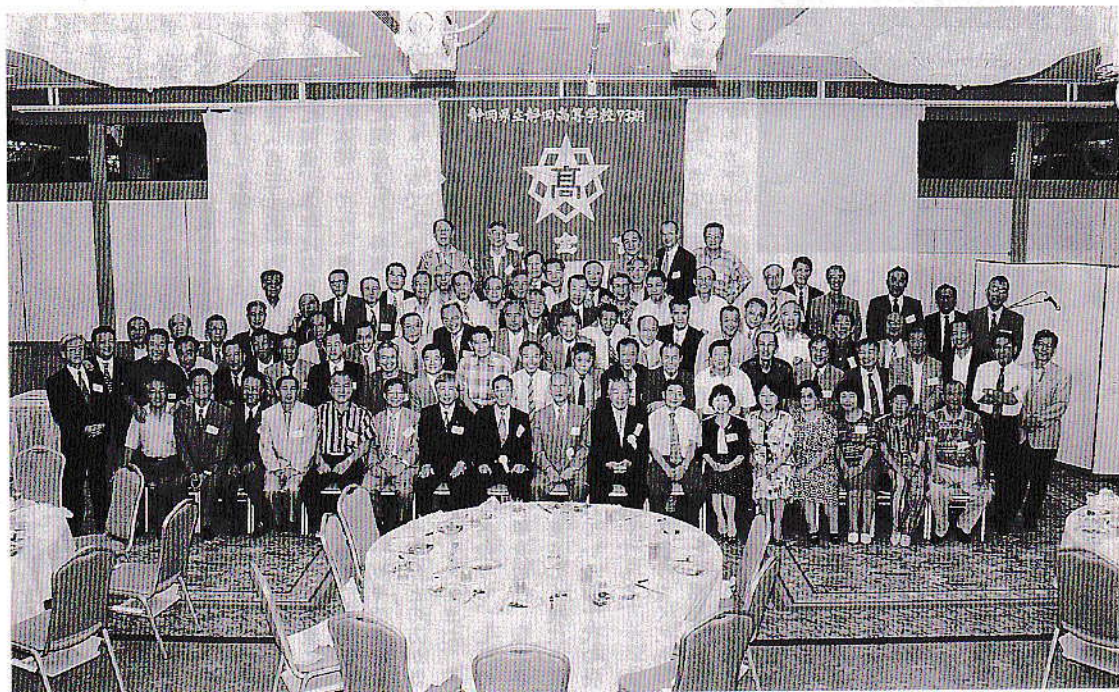
七三期

今年の夏は特別な猛暑が続く日であったが、そんな盛夏、八月十日(日)静岡駅南口に新装オープンしたホテル・センチュリー静岡にて、七三期卒業四十周年記念同期会が開催された。

さて、この同期会の模様をご報告する前に、先ずは有志による母校訪問の様子をお伝えしたい。

静岡卒業以来四十年、当時の面影の残る校門を入ると面目を一新した新校舎と、きれいに手入れされた美しい緑が眼に映える。落着きと格調のある雰囲気は驚かされる。懐かしのグラウンドでは新野球部が早くも来年に向けて快音を響かせている。今夏は惜しくも最後に一敗地にまみえた野球部に「来年こそ甲子園へ」と祈るような気持ち。変わったと言えは校内に行き交う女子学生の多さ。さながら女子校を訪問しているような錯覚。我々同期の女性はずか十二名であった事を考え併せると今昔の思いを新たに。ここで、この選び抜かれた同期女性を記しておこう。(一)内は旧姓。

渋谷(国崎)けい子、新家淳子、林(小田)さち子、間淵(渡辺)啓子、中島(本堂)佳子、そして



今回は出席できなかった福地(田中)睦美、後藤(伴野)孝子、田中(小川)泰子、遠山(小沢)敦子、西田(阪本)和子、飯塚(佐藤)迪子、小野田(栗田)澄子である。

ここで閑話。四十年前の昭和三十三年の世相と言え、三十五年安保改定調印時の宰相、岸とアイクの日米両国の舵を取っている時代、ソ連の初の人工衛星スプートニクが初めて宇宙へ飛び、日本では東海村で原子炉実験に成功し、インドに続いてアジアで二番目の原子炉稼動国となった。そろそろ戦後復興期に突入したと言って良いだろう。そんな時代を生きた同期の仲間でははいよいよ記念大会。三三五、会場に集まってくる同期生の喜々とした顔、顔。

来賓として杉山、吉川、平岩の三先生をお迎えする。進行役は西谷祐一君。先ずは発起人代表の吉見龍夫君(吉見書店主)の「四十年記念として恩師と同期の皆さんと共に再会を喜びたい」との代表挨拶に始まり、不幸にして早逝した十四名の仲間の冥福を祈って黙祷を捧げる。そしていよいよ乾杯。関東同期会長の山中博司君(硬式テニス部)の若々しい発声にて開宴となる。クラス別に並んだテーブルを囲み、和やかな会話

がはずむ。卒業後、初めて再会するという友もあり、「オレ、オマツチ」と旧交を暖める光景が続く。同期の遠州は間瀬商店特製の吟醸酒も花をそえる。合間には司会者の名調子に踊らされて次々に壇上へ。近況報告が続く。山梨由記君(柔道部)推奨の音楽大学の女学生の弦楽四重奏「ドルチェ・カルテット」の柔らかな演奏が、

これまた華を添える。恩師よりは「七三期の各クラスの担任は先生の年齢順で決めたため、当時一番若かった平岩先生が三八HR、吉川先生が三六HR……」と当時の隠されたエピソードも披露され一同納得。更に「強い野球部に応援団が必要」と言う事で、猛者の多かった柔道部に応援団の結成を先生方から頼んだ事なども披露された。

それにつけても卒業以来四十年、憶い出す事と言えば、

一、百分授業に出るタメ息と睡魔
二、麻機へのマラソンの途中、城北高校横で受けた黄色い声援
三、ブルの高飛び込み台からの恐怖のダイビング

四、一時間目終了後の早弁の味
五、浅間神社の百段登り
六、仮装行列にかけた印高祭
七、学校からの帰途立ち寄った長

谷通りの一富士(あの三姉妹はどうしているだろう)

また、運動部花盛りの時代で野球部は勿論強く、陸上部の中西、硬式テニス部の山中、牧田、大河内、柔道部に山梨、田村、飯塚、ラグビー部の中島、岩崎、友田、矢部、バスケット部に杉山、サッカー部に石川と数え挙げたら枚挙に限りなし。かく申す私めは図書委員としてよく図書室へ。当時司書であった特別可愛らしかった錦織嬢は今いずこ。

宴たけなはの中、有志が持ち寄った品々のオークションが始まる。初めての試みだが、山梨由記君の競りの掛声にのって瞬く間に完売。売上金ウン万円は当日の会費の一部となる。最後に、弦楽四重奏の伴奏で校歌と道遙歌の合唱。元早大応援団長、友田力君の発声で「来年は還暦を祝し、また

元気で逢おうではないか」と再会を誓い合って、二次会会場へと急ぐ。

翌日開催された恒例のゴルフ大会には三六名が参加して鈴木久弥君(野球部)が優勝した。七三期は熱心な幹事の努力により交流が盛んで、喜ばしい限りである。関東地区在住(百三十名)の同期会も毎年秋に開催、本年は日比谷公園内の「松本楼」で十一月二十九日(土)に開催され、静岡名物の黒ペンも「おでん」として特別参加をした。静岡在住の同期の方や地方の仲間も是非参加して欲しいと願っている。(深沢靖男)

九〇期

昭和四十九年三月卒業の九〇期もいつの間にか不惑の歳を過ぎてしまいました。さて、去る九月二十八日にアルカディア市ヶ谷(私



「ご来店をお待ちしています」と、一富士の古本容子さん。

学会館)を会場として約一年半ぶりの関東地区の同期会を行ない二名の参加がありました。これまで四年をめどにオリンピックの年に開催していたのですが、前回の終わりに希望をとったとき「四年に一度だと、次にどこにいるかわからない」との声があったことが残っていたからです。

少し前の名簿を頼りに関東に住んでいる(住んでいた)と思われる方、約九十名にハガキで連絡をとりましたが、十名ほどの方が既に転居されていました。また、前回出席の約三十名のうち、七名の方が海外勤務、単身赴任、転居されていることはまさしく現代の最前線で活躍されている四十代の現実を窺い知る思いでした。

会場からは「人数少なくてちょっとさみしいぞ」との感想もありました。なお、女性の参加者は九名。寒くなる前に、そして結婚式シーズン前にとこの時期に設定したので、が、「運動会」でこれないとの返事を頂いたのも無視できない数でした。出席できなかった方、ごめんなさい。

しかし、顔を合わせれば卒業後二十年+アルファを過ぎていようとも、心は静高生のままで現在の様子から静高在学中のころ、果て

は幼稚園から同級生であったことなど話題は多く広がるとともに子育ての方面にも及びました。懐かしい一富士はどうなっているかの質問に、最終回の近かった「あくり」の話題をまくらに吉行淳之介の静岡に触れた作品にでてくるアイスクリーム屋とは一富士のことであるとの解説もありました。

とにかく、高校一年の自己紹介の一節を持ち出して現在と比較する技もありました。静岡にせよ関東地区にせよ同級の会に初めて出席された方も複数。

出席された方の中に二世が今春静岡に入学された方(というところは静岡からの出席)もあり、関東に住むものからは「おめでとう、うらやましい」の感想とともに、気持ちちは十代でもしつかりと親の世代を形成していることを再確認。どうも現在の静岡は女子の比率が上がり彼女らの間でもルーズソックスが流行しているようです。制服の色は昔のままのようですが。

話題に上ったものの現在の様子がわからなかったのが仮装行列。当時は準備のために市内を自転車で行き巡り、見知らぬ家の玄関先でリヤカーを借りる交渉をしたり竹を確保するためにお寺の境内の

掃除をして蚊にたかられたり、準備期間中、五時の作業中止・下校後に同級生の家の庭に集まり発表に間に合わせるため暗くなっても残りの作業を続けたり。

今回の九〇期同期会(関東地区)は参加者の希望は十一月に、そして二年ごとということになりました。会場として適当な場所の心当たりのある方はご示唆をよろしく願います。なお、同期会の幹事は今回に引き続き見城(31)と川勝(37)が担当する予定です。何かと転居の多い世代ですので、引越の際には郵便局に転居届を、それも可能ならば数年に亘って郵送しておいてほしいと感じました。郵便局への転居届の有効期間は一年ですが複数回(年)届け続ければ郵便物の転送がそれだけ続きます。転居届は郵便局の窓口に準備されていますし、投函時は通信事務扱いで切手なども不要です。

三年間、土足で入るあの古い校舎で過ごした仲間の筈ですが、歳月の魔法で外見は少し変わり始めています。しかし、会えば懐かしい印高生に戻ります。気楽に参加できる同期会を続けたい、また皆さんにお会いしたいと思いつつ三時間ほどの会はお開きとなりました。

(川勝健二郎)

関東同窓会の

ますますの発展を

めざして……

同窓会員の親睦をはかるため、幹事のみなさんの格別のご尽力に心から感謝申しあげます。

混沌たる社会情勢、多忙な毎日と思いますが、幹事は特に同期生へより一層の呼び掛けをしていただきたく、また、会員諸兄姉は幹事へのお力添えを熱望いたします。

とくに会員数も多い75期と113期は、年会費納入など、期によって大きな差があります。が、ヤングパワーに期待すること大、よろしくご協力ください。

建設的なご意見や

参与を、そして

ひとりでも多くの

年会費の納入など

ぜひ、積極的な

ご協力を！

各期幹事一覧

幹事が変更の場合は事務局までお知らせください。特に幹事未定の期(83・88・91・98・99・101)は至急選出してご連絡を！

- | | |
|--|-----------------------------|
| 68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | 69…宮崎吉英・山本龍男 |
| 69…大石次男 | 70…味岡 宏・川端正良・関哲男・中馬敏雄・宮本達治 |
| 70…63…木下景一 | 71…児玉文男・後藤弘枝・海野幸雄・篠原 直 |
| 71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | 72…板井亮介・深田 均 |
| 72…65…田中俊男 | 73…杉山 光・中西英一・山中博司 |
| 73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | 74…佐藤鏡司・藤原経史 |
| 74…67…岡英彦 | 75…後藤正義 |
| 75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | 76…酒井孝太郎・鈴木 浩 |
| 76…69…大石次男 | 77…加藤重信・野方重人・三浦位通・清水雅尚 |
| 77…70…63…木下景一 | 78…鈴木藤男 79…上田尚亮 |
| 78…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | 80…野崎幸彦・諸星勝保 |
| 79…72…65…田中俊男 | 81…鈴木素明・萩原英昭 |
| 80…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | 82…杉本三郎・堀内淳司 |
| 81…74…67…岡英彦 | 83…神原明生・田辺 哲 |
| 82…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | 84…池田幸司・増井喜一郎・深津俊郎 |
| 83…76…69…大石次男 | 85…成岡和美・井出慎吾 |
| 84…77…70…63…木下景一 | 86…橋村芳一・平岩正史・藤科名雄・沢井良輔・石川嘉和 |
| 85…78…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | 87…鳥巢 修 |
| 86…79…72…65…田中俊男 | 88…荒井千明・小林一郎 |
| 87…80…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | 89…清水 篤 |
| 88…81…74…67…岡英彦 | 90…岡村幸彦・望月 朗 |
| 89…82…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | 91…松野敦子 92…新村昌弘 |
| 90…83…76…70…63…木下景一 | 93…奥山規之・細沢 優 |
| 91…84…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | 94…藤森 尚 100…船橋 智 |
| 92…85…78…72…65…田中俊男 | 102…伊藤祝高 103…相坂摂治 |
| 93…86…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 94…87…80…74…67…岡英彦 | |
| 95…88…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 96…89…82…76…70…63…木下景一 | |
| 97…90…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 98…91…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 99…92…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 100…93…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 101…94…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 102…95…82…76…70…63…木下景一 | |
| 103…96…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 104…97…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 105…98…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 106…99…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 107…100…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 108…101…82…76…70…63…木下景一 | |
| 109…102…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 110…103…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 111…104…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 112…105…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 113…106…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 114…107…82…76…70…63…木下景一 | |
| 115…108…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 116…109…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 117…110…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 118…111…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 119…112…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 120…113…82…76…70…63…木下景一 | |
| 121…114…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 122…115…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 123…116…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 124…117…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 125…118…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 126…119…82…76…70…63…木下景一 | |
| 127…120…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 128…121…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 129…122…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 130…123…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 131…124…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 132…125…82…76…70…63…木下景一 | |
| 133…126…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 134…127…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 135…128…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 136…129…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 137…130…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 138…131…82…76…70…63…木下景一 | |
| 139…132…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 140…133…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 141…134…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 142…135…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 143…136…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 144…137…82…76…70…63…木下景一 | |
| 145…138…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 146…139…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 147…140…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 148…141…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 149…142…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 150…143…82…76…70…63…木下景一 | |
| 151…144…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 152…145…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 153…146…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 154…147…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 155…148…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 156…149…82…76…70…63…木下景一 | |
| 157…150…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 158…151…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 159…152…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 160…153…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 161…154…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 162…155…82…76…70…63…木下景一 | |
| 163…156…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 164…157…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 165…158…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 166…159…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 167…160…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 168…161…82…76…70…63…木下景一 | |
| 169…162…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 170…163…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 171…164…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 172…165…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 173…166…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 174…167…82…76…70…63…木下景一 | |
| 175…168…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 176…169…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 177…170…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 178…171…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 179…172…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 180…173…82…76…70…63…木下景一 | |
| 181…174…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 182…175…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 183…176…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 184…177…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 185…178…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 186…179…82…76…70…63…木下景一 | |
| 187…180…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 188…181…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 189…182…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 190…183…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 191…184…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 192…185…82…76…70…63…木下景一 | |
| 193…186…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 194…187…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 195…188…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 196…189…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 197…190…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 198…191…82…76…70…63…木下景一 | |
| 199…192…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 200…193…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 201…194…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 202…195…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 203…196…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 204…197…82…76…70…63…木下景一 | |
| 205…198…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 206…199…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 207…200…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 208…201…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 209…202…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 210…203…82…76…70…63…木下景一 | |
| 211…204…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 212…205…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 213…206…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 214…207…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 215…208…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 216…209…82…76…70…63…木下景一 | |
| 217…210…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 218…211…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 219…212…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 220…213…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 221…214…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 222…215…82…76…70…63…木下景一 | |
| 223…216…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 224…217…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 225…218…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 226…219…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 227…220…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 228…221…82…76…70…63…木下景一 | |
| 229…222…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 230…223…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 231…224…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 232…225…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 233…226…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 234…227…82…76…70…63…木下景一 | |
| 235…228…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 236…229…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 237…230…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 238…231…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 239…232…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 240…233…82…76…70…63…木下景一 | |
| 241…234…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 242…235…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 243…236…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 244…237…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 245…238…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 246…239…82…76…70…63…木下景一 | |
| 247…240…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 248…241…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 249…242…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 250…243…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 251…244…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 252…245…82…76…70…63…木下景一 | |
| 253…246…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 254…247…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 255…248…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 256…249…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 257…250…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 258…251…82…76…70…63…木下景一 | |
| 259…252…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 260…253…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 261…254…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 262…255…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 263…256…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 264…257…82…76…70…63…木下景一 | |
| 265…258…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 266…259…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 267…260…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 268…261…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 269…262…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 270…263…82…76…70…63…木下景一 | |
| 271…264…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 272…265…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 273…266…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 274…267…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 275…268…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 276…269…82…76…70…63…木下景一 | |
| 277…270…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 278…271…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 279…272…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 280…273…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 281…274…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 282…275…82…76…70…63…木下景一 | |
| 283…276…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 284…277…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 285…278…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 286…279…86…80…74…67…岡英彦 | |
| 287…280…87…81…75…68…高橋俊見・荒谷じつ子・大川庄治・雨宮明生 | |
| 288…281…82…76…70…63…木下景一 | |
| 289…282…83…77…71…64…野沢正憲・渡辺素夫 | |
| 290…283…84…78…72…65…田中俊男 | |
| 291…284…85…79…73…66…朝比奈正三・梶原由三・成岡英彦 | |
| 292…285…86…80…74…67…岡英彦 | |

回想・随感・近況など

八月ッ児

43期 長戸 寛美

私は明治四十三年一〇月の生まれで、今月米寿を迎えることになる。私がセツカチであったのか、予定日より二月も早く生まれた。俗に言う八月ッ児で未熟児、今でなら、さしずめ哺育箱の厄介になったろう。

そのためか、体が弱く、ジフテリアが流行ればジフテリア、肺炎が流行れば肺炎と、よく病氣を引き受けた。小学校に上がってから病氣勝ちで、学校を休んだ。それが小学五年の時に猩紅熱という熱病に罹ったのを機に病み抜けとなり、それから段々丈夫になった。

だから、八月ッ児の虚弱児が数え年にもせよ、八十八歳まで生き永らえたについては、親のご恩もさることながら、天の恵みありがたい限りである。

私は、大して運動らしい運動もしない。殊に、足首の関節炎で歩行が不自由になってからはゴルフもやらず、ジョギングなど思いも

よらぬ。そこで、考えてみると、体に良からうと思ふ事で自分のして来たことといえば、朝起きがけの水かぶりと朝粥だけだろう。

水かぶりは、中学二年のときから始めた。ほとんど毎朝、どんな寒いときでもやった。やらないでいると、その日一日氣持が悪いので、毎日続けた。勤めるようになって、出張先の宿屋でも水をかぶった。永く続けた。六十歳台になって、医者から「それこそ、年寄りの冷や水。心臓に悪いから、スグやめて下さい」と脅かされて、暫くして止めた。

朝粥は、七十四歳大病をやって退院してからはじめた。白粥に生ま卵をかけ、しらすぼしに大根おろしを混ぜたのをおかずにして、粥茶碗の大きいのに二杯食べる。それに、スライス・チーズをかじりながら薬用養命酒を一杯のむ。この朝粥をはじめてから十二年になる。

無芸無能の人間だから、これからも、朝粥を食べ、好きな本を読んで生きるしかあるまい。

老後雑感

49期 菅沼 栄

関八洲で活躍の諸兄、健在なりや。

今やほぼ傘寿を祝うころ、龍爪山の想い出を語り合い、八面玲瓏富士の嶺を仰がん哉。

戦後の東京地区のあゆみ、つぎの如し。

昭31・4・26	於東京駅みかど
昭32・1・26	於福神商店
昭34・1・12	於東京駅みかど
昭35・5・17	於東京駅みかど
昭37・9・5	於東京住友クラ
昭42・1・28	於ホテルニュー
昭43・10・18	於鯉の浦
昭45・3・25	於鯉の浦
昭46・3・16	於東京ステー

昭43・10・18 於鯉の浦 11名
昭45・3・25 於鯉の浦 14名
昭46・3・16 於東京ステー

ショホテル

16名

爾後は東京での会合は中止し、静岡の同期会に移る。

なお、平成になり東京地区の物故者は次の通り。

佐藤正鶴(配属将校)

1・12・3 没

江山秀明 2・8・24

上杉一郎 2・12・3

矢崎宗男 3・1・5

安本 久 3・7・3

浦野庸二 3・10・30

曾根重四郎 4・9・6

小林道雄 4・12・9

鈴木 鑑 6・12・23

伊藤徹次郎 7・5・4

陰山修次 8・2・24

加藤 馨 8・2・24

長谷川一忠 8・6・23

全く我々大正生れの者は「大正生れ」のメロディを吟んで氣を晴らしている。

(一)大正生れのオレ達は明治の親父に育てられ忠君愛国そのままだにお國のために働いてみんなの為に死んでゆきや

日本男児の本懐と覚悟を決めていたなあお前

(二)大正生れのオレ達にや再建日本の大仕事

政治、経済、教育とただがむしやに三十年

泣きも笑いも言い尽くして

やっと振り向きや乱れ足

まだまだやらなきゃなあお前

(三)大正生れのオレ達は

五十、六十、のよい男

子供も今ではパパとなり

可愛い孫も育つて

それでもまだまだ若僧だ

やらねばならぬことがある

休んじやならぬぞなあお前
追記：「大正生れ」は作詞者、小林朗(神戸商大卒)。

更に次の歌がある。

「男なら」 石田一松

男なら男なら

敵に負けても

くよくよするな

妻や息子や娘や孫に

元の日本にして返せ

男ならやってみな

以上の通り歌って暮らしています。

八十歳になって

50期 丸尾 文治

八月の初め、丁度四十年前に留学した時の先生から一通の手紙が届いた。

九月二十四日は私の八十の誕生日ですから夕食を差し上げたいので御招待します。出席して下さい。というのが一番の楽しみです。という大変ていねいな招待状でした。

日本流ですと関係のある誰彼がお祝いをしようという事になるけれども、本人から招待状を出すというのがアチラの風習なのかと考えながら、とにかく行って見ようと家内と二人で出かけることにしました。

先生が住んでおられる処はサンジゴの郊外のラホヤという町です。この町は一年中気候温暖でアメリカ人の理想は若い時によく稼いで、早く隠退してラホヤで悠々自適の生活を送ることだといわれています。先生はしかしまだ現役で、当地にあるスクリプス海洋研究所で、カナダ、フランス、日本などの人達と旺盛な研究を展開しておられます。アメリカでは有能な人には停年はないらしい。

パーティーには世界中から百名近くのお客様が集まって、盛大でしかもリラックスしたとても愉快な会でした。日本からも六名の出席があり、先生を囲んでお祝いをしました。先生も大変御機嫌よく普通の活力と親切さで、翌日も翌々日も色々面倒を見て下さって、帰る日には早朝八時にホテルから飛行場まで送って下さるなど、とても楽しい旅行でした。

さて、昭和五年に静岡中学に入學した私達は来年三月までに皆八十歳になります。入學した時には皆若々しい少年で、まさか八十になるとは考えてもいませんでしたが、アッという間に八十になってしまったような気がします。

私達五十期は毎年春、木下開一郎君達を中心になって静岡でクラ

ス会を開いて下さるので、毎年集まる機会があります。八十になる今年の春も多くの友人が元気で集まりました。

関東地区の同級生は十七名で、毎年秋に集まることにしています。講演や執筆で忙しいという江川君や、毎日奥さんと一緒にテニスを楽しんでいる浅賀君や、相変わらずおしゃべりな山田君、毎年アメリカの息子さんを訪問するという大庭君、はるばる伊豆湯ヶ島から出て来てくれる鈴木君など、私のアメリカの先生に負けない元気な友人がたくさん居ます。中でも一度も出席したことのない緑川君は毎日の診療が忙しいので日曜日ではないと出席出来ないというバリバリのお医者様です。

若い同窓生の皆さん、若いと思っているうちに、すぐ八十歳になりますよ。命短し恋せよ乙女、紅き唇あせぬ間に、熱き血潮の冷えぬ間に!!



静岡の万葉を歩く

(その十五)

51期 原崎 郁平

三保の松原に万葉歌碑が2つ建っている。羽衣の松のすぐ近くである。次の歌碑はその一つである。

いははらの 淨見(きよみ)の
崎の 見穂(みほ)の浦の
寛(ゆた)けき見つ

もの念ひもなし

田口益人 (巻三二九六)

平成三年三月二〇日建立

揮毫者 平野耕雲 建立者 清水羽衣ライオンズクラブ

大きさは高さ九二センチメートル、幅三四センチメートル。ただしこの歌碑は石碑でなくステンレス製である。

歌の大意は「この清見の崎から三保の浦までの広々とゆったりした景色を眺めていると感無量になってしまつて何とも言えぬ思いだ」である。

この歌碑に行くのには、JR清水駅から国道一四九号線を南下して折戸経由三保岬に入ってから約三キロメートル行くと三保の松原入口の標識があり、右に曲がり御穂神社前を経由して松並木を直進すると駐車場と土産物数軒の前に

出る。羽衣の松へ行く手前の上り坂の左手に立っている。

詠み人の田口益人は、和銅元年(七〇八年)三月上野国司に任ぜられ、赴任の旅の途中に見た三保の美しさを歌った。この頃の国内は経済改革の元年を迎える。国内の天然資源は天武天皇時代(六四七年)に対馬から銀が発掘されて献上されていた。その後、六九一年に伊予、七〇三年に紀伊からも献上されていた。他に水銀や金も時代を追って献上される。武蔵国秩父郡から、始めて自然銅が献上され、朝廷ではそれを祝って年号を和銅としたのであるがそれまでは、米や布などの物々交換の経済であった。これらは律令体制下の調や庸としての国の政策でもあったが、経済改革の元年として通貨の普及は少しづつ進んでいた。なお平安中期の乾元大宝までの十二種類の銭貨の材料は銅であった。その後、和銅四年(七一一年)の蓄銭叙位令によって貨幣経済は急速に伸びていく。また、朝廷は東北方面の領域拡大にも力を注いでいった。これは、大和朝廷にとって百済救済の失敗から、本格的に国内改革を重視していくのであり、未開の地の平定は最大の急務であった。こうした時に田口益人は上野国司に任ぜられるのである。新しい任務の使命感と義務感の中ではほんの少しだけ心細さがあったとするなら、難所の地である薩埵峠を越えて清見の崎から見える三保の浦は何とも言葉に表せない程の感動を覚えたのであろうし、今までの不安もこの時だけは吹き飛んだことであらう。



万葉集と翻訳

51期 佐伯 正剛

先頃までは万葉集の歌は朝鮮語で読めるという本がよく売れているというのをよく聞きました。

実は筆者も十年程前から万葉集に関係ある図書は何冊か読み直しております。ここでは一般に「万葉秀歌」と謂われているもののうち三首をとりあげて、著者の方々の夫々に対する鑑賞の一部を忠実に比較してみたいと思います。

参考図書については本稿の末尾に掲げました。従って文中で引用の場合に読み易いように仮番号を付けました。引用部分はこの番号と共に「カギカッコ」を付し筆者の意見は全く加えないことにしました。

三首の表記と原文(白文)

万葉集全二十巻は全体で約四千五百首ほどありますがここでは紙面の都合もあり、短歌二首だけとしました。この選定は特に意味はなく偶々手許にある図書中多くの著者が共通に挙げており、又一般によく知られているものうちその鑑賞について見方が異なると思われるものにつき男女一名ずつとしたまでのことです。なお古来難解とされ最近「やはり万葉集の歌

は韓国語で書かれていた」といわれるもの一首を追加しました。次にこれら三首を掲げます。

(一) 巻一の二〇 額田王

あかねさす紫野行き標野行き
野守は見ずや君が袖振る

(二) 巻一の四八 柿本人麿

東の野に陽光の立つ見えて
かえりみすれば月傾きぬ

(三) 巻一の九 額田王

莫釐円隣之大相七兄爪謁氣
我が背子がい立たせりけむ敷置が本

以上三首に対する著者の解釈等の抜粋。

前記三例につき著者の解釈及び鑑賞文の一部を抜粋しましたが引用の場合は努めて出典の通りとしました。

(一)「あかねさす」について

出典(一)「一首の意は、お慕わしいあなたが紫草の群生する蒲生の御料地をあちこちとお歩きになつて、私に御袖を振り遊ばすのを野の番人から見られはしないでしょう。それが不安でございませう」というのである。

出典(二)「大意、額田王の歌。紫草の群生した野を行き、標めじしをつけた立入禁止の御料の野を行き来して、あなたが私に向つて袖を振っていらっしゃる。野の番人が見咎めはしないかしら。」

出典(三)「前略、例の額田と天武の歌のやりとりは、華麗で意味深長だけれども、あまり深読みしない方がいいのである(この間に額田王のこの歌と大海人皇子の歌が入る。筆者註)二人共すでに三十半ばを過ぎており(大海人を四十過ぎと見る説もある)、純愛の恋物語とはどうも想像できない。その意味で、これを公開された宴の歌と見る説に私は賛成したい。」

(二)「東の野に」について

出典(一)の「これも四首中の一つである。一首の意味は、阿騎野に宿った翌朝、日の出前の東天に既に暁の光がみなぎり、それが雪が降った阿騎野にも映って見える。その時西の方を振り返ると、もう月が落ちかかっている、というのである。」

出典(二)「第三首に至ると一転して、早朝の大きな叙景を述べる。この歌は長い間訓み積くことが出来なかった。原文『東野炎立所見而反見為西渡』という、あまりに簡単な表記だったからだ。古くは上三句を『アヅマノノケブリノタテルトコロミテ』と訓んでいた。契沖・真淵らの努力で、今の訓みに決定した。『かぎろひ』は

東天の曙光である。東雲の光を見て、雲へ出立するのであるからその刻限の叙景歌ながら、この長短歌のなかにはっきり所を得ているものと言えよう。今や朝粥に出で立とうとする気持のはやりを、言外に汲み取ってもよからう。」

出典(三)「(前略)さて、ここに

泊ってみるといよいよ昔が思いだされ、なかなか寝つかれない。何の風情もない荒野にこうして泊るのも、それが草壁の形見と思うからである。」「と、ここまで歌いつづけて来て、次に『東の野にかぎろひの……』が入るのだ。してみると、これは単なる叙景の歌ではないことは明らかである。ある人は、長歌に続く四首の短歌には、一貫した時間の経過が感じられるという。草壁のことを思い出して眠れずにいると、いつの間にか夜が白々と明け、ちらちらと陽光が動き始めた、と言うのである。(中略)朝の喜びなどと言いきってしまえない回想の重さの中で、人麿の瞳は、静かに地平を見つめている。」

出典(四) 著者は「ファンタジーの世界——能の世界」という見出しで三頁近くに亘って広く内外の文献を参考として鑑賞しているの

抜き書きしてみます。「昔からこの歌は『東野にけぶりの立てる所見て(以下略)』と読まれてきました。この『炎』は『かぎろひ』でなく『けぶり』と読まれてきたのです。(中略)「狩には、野焼をして獲物を追いたてるのでしょ

う。また夜になってもそういう炎が見え、けむりが立っていたのでしょ。か。(中略)この歌は、やはり西に傾いている月が主題であると思います。その西の月と、東の炎が対立するのである(後略)。

出典(四) 著者はこの歌について「韓国音」と「韓国訓」を用いて十七頁に亘って解説しています。

その中で「従来の解釈」と「真の意味」とについて述べています。詳細の検討結果を割愛して後者だけを抜き書きしてみますと、

「暁の 星数えいて 御目文字し 嬉しがれば 頷かれ行く。」
「暁の星を数えていたら、お目にかかり嬉しがる」と頷いて行かれた(後略)。」

筆者の考察の一端

漢字仮名交り文の表記は本来原文(白文、即ち万葉仮名を主用した漢字文)からの翻訳であるとの前提に立ってみますと、前記を一読して解釈は誠に困難であり多岐であると感じました。紙面の都合で

中略や後略が重なり誠に読み難いものとなりました。結論としては

新旧の日本語は漢字の急速な導入と音訓の併用の為か両者間の翻訳が極めて困難であることに因りましよう。ましてや他言語間の翻訳は難しいということは今更ながら痛感しつつ、この稿を終ります。

(平成二、十一、三、初稿、同九、一〇、二〇、一部修正)

参考図書

一万葉秀歌上下巻 斎藤茂吉

岩波新書

二万葉秀歌鑑賞 山本健吉 講談社

三今日に生きる万葉 永井路子

文春文庫

四万葉を考える 梅原猛 新潮社

五もう一つの万葉集 李 寧熙

文芸春秋

六人麻呂の暗号 藤村由加 新潮社

七朝鮮語で万葉集は解説できない

安本美典 JICC出版局

八白文・新訓万葉集(上・下巻)

佐々木信綱 岩波文庫

中 高 年 登 山

66期 石川 剣二

定年を迎えられたみなさん、いかがお過ごしですか。太平洋戦争の真っ只中、一九四四年(昭和十九年)入学、戦後の学制改革を経て一九五〇年(昭和二十五年)卒業の66期生は、年齢が六十代後半に入り、年金生活を送っている人が多いと思います。小生も定年、嘱託、アルバイトを経験した後、「毎日が日曜日」となり、早くも半年がたちました。健康維持となにか趣味らしいものをと、十年ほど前から始めた、ある一人の中高年の山歩き(の現況を報告したい)と思っています。

きっかけは尾瀬でした。さわやかな空気、ミズバショウ、リュウキンカの可憐な花々。その地の雰囲気(にすっかり魅了されました。その上、にぎわう木道を歩く登山者を撮った写真が、当時受講していたNHKの写真教室で優秀賞に選ばれたのも、山歩きを続けさせたいと思います。尾瀬はその後も訪れ、アヤマ平、三条の滝、尾瀬ヶ原、尾瀬沼などを歩きました。若いころは山とはまったく無縁でした。だから山岳地図の読み方、リュウキのバックキング、携帯品

で欠かせないもの、などなど知らないことばかりです。幸い最近では中高年を対象にした登山の本、雑誌、テレビ番組が増えてきたので大助かりです。さて、いざ山に行こうとしても列車やバスの時間調べ、山の難易度の調査など、若いころにやっていないので、すごく面倒に感じます。そこで旅行会社で募集するツアー登山を大いに利用しています。ツアー登山を邪道視する人もいますが、中高年になって山歩きを始めた者には、こんな便利でありがたいものはありません。以下今年の山行記録ですが、日ごろは鎌倉の近くに住んでいるので、天園や大仏のハイキングコースをトレーニングと考え歩いています。

四月 丹沢の大山(標高一二五—m)。冬の間これといった山に登っていないので、これからに備えての訓練と考えての登山です。ケーブルカーを利用、阿夫利神社下社から登り、日向薬師に下山。単独登山。

●奥多摩の御前山(一四〇五m)。カタクリの花で有名。奥多摩周遊道の月夜見展望台から小河内峠を経由山頂へ。山頂はミズレまじりの小雨。奥多摩湖へ下山。ツアー登山。

●御坂山塊の黒岳(一七九二m)。富士山の展望台ともいわれるコースを歩く。天下茶屋を出発、河口湖畔まで約5時間の山行。アップダウンが激しいコース。ツアー登山。

五月 丹沢ノ塔の岳(一四九一m)。ここ三、四年体力づくりを兼ねて登り続けている。いつものようにヤビツ峠をスタート、山頂へ。下山は通称バカ尾根を大倉へ。山頂では安全祈願の係仏(尊仏)まつりが開かれ、野生の鹿が相変わらず登山者に食べ物をねだっていた。単独登山だが日曜日なのでかなりのにぎわいだった。

六月 尾瀬。群馬県側の大清水から三平峠を越え尾瀬沼へ。この間小雨が降り続いた。尾瀬沼を一周した後、福島県側の沼山峠下へ。雨は降ったりやんだり。夜行日帰りの単独登山。

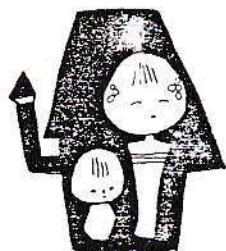
七月 櫛形山(二〇五四m)。アヤマの群生地として知られる。池の茶屋林道から奥千重、裸山、アヤマ平と歩き、北尾根を下り、約4時間の行動中雨だった。アヤマの咲くころは雨も致し方ない。ツアー登山。

八月 至仏山(二二八m)。鳩待峠から小至仏を経て約3時間

で山頂。下りは今年から再開された、尾瀬ヶ原の山の鼻に至るコースを歩いた。登山道は整備されていたが、急勾配の標高差約八〇〇メートル、2時間は敷かった。夜行日帰りの単独行だったが、土曜日で山にはぎやか。

九月 仙丈ヶ岳(三〇三三m)。北沢峠から宿泊の馬の背ヒュッテまで雨。気温4度。昨年は七月下旬の登山で汗をかいしたが、今回は肌寒さを感じる。翌朝はまだ暗く、天気が回復した星空の下午前五時、ヒュッテを出発。前日の雨は山頂近くは雪だった。積もるほどではなかったが、気温が低く凍りついたところが、慎重な行動を続けた。小仙丈岳経由で下山。シーズン最後ともいえる土、日曜の登山だったのでヒュッテ大入り満員。ツアー登山。

以上が今年のハイキング、登山の記録ですが、苦しい思いもあります。八月上旬、標高日本二位の北岳登山のツアーに参加しました。一行二十人、登り始めて間もなく、脇腹が痛みはじめ遅れ出しました。全員がゆっくりしたペースで登ってくれ、みなさんの迷惑にならないよう頑張りましたが、痛



みと、ひどい汗。約3時間たったところで予定より早い地点での朝食。しかし食欲がまったくありません。ここで決断しました。登り続けると全員にますます迷惑をかける、いままら一人で下山できると。何人かが「もう少し頑張った」と言ってくれましたが、本人が弱気になってしまい単独下山しました。三、四年前標高日本一の富士山に登り、その頃から今度は二位の北岳登頂にあこがれていました。この日の断念で、北岳は体力的に、年齢的にも登ることが出来そうにない、と分かった時、非常にさみしい思いがしました。

トランジスタ

発明から五〇年

67期 向井 久和

先日、未来学者アルビン・トフラー氏の講演を聴きました。その講演で彼は、彼の著書「第三の波」(一九八〇年)で描いた高度情報社会に向かって時代が急速に変わりつつあり、電子インフラストラクチャの発展がその鍵を握っていることを指摘していました。新しい時代の波の契機となったトランジスタが米国ベル研究所で発明されてから今年丁度五〇年になります。発明後約十年して集

積回路、約二十年してLSI(ラージ・スケール・インテグレイション)へと進化し、その後もVLSI、ULSIと呼ばれて大規模集積化が進んでいます。この間半導体は、一チップに搭載される素子数で七桁の進歩をし、これに逆比例する素子当たりの価格低下が得られ、コンピュータ、通信、家電、電子機器の発展に大きなインパクトを与え、自らも自動車産業と並ぶ一大産業に成長しました。

集積回路によりコンピュータが大きく発達しましたが、マイクロプロセッサ等のLSIがパソコンを著しく発展させ、コンピュータ業界にオープンシステム化と言われる変革をもたらしました。

通信分野でも半導体技術の恩恵を受けて、知的で多様なサービスを実現する高度なネットワークが有線、無線、衛星を活用して地球を網羅しつつあります。そして、ネットワークのオープン化による事業の活性化が進んでいます。

また、LSIによるデジタル技術の発展は、音声や画像もデジタルで表現しコンピュータデータと同様に処理することを可能とし、マルチメディア時代の到来となったわけでありです。今やスーパーコンピュータの機能がLSI

によってゲーム機にも搭載され、サイバースペースの世界が実現されつつあります。AV機器のデジタル化も華やかです。カメラはデジタル化により性格を変え、パソコンへの写真の入力手段となり、家庭で写真と文章の編集が出来るようになりました。マルチメディアの進展はコンピュータ、通信、民生機器の産業間の融合を促すと言われています。

こうしたインフラストラクチャの進歩は、私達の生活や仕事の環境を大きく変えつつあります。パソコンの普及により在宅勤務が普及し始めており、携帯電話が私達の生活や仕事の習慣を変えつつあります。コンピュータと通信の結合によるインターネットの爆発的普及が進行中で、今後人々の仕事、生活から文化にまで多大な影響を与えと言われています。実験が始まりつつある電子商取引もその一つであります。電子マネーの時代が近づきつつあります。ここではICカードが活躍します。

さて、これからのLSIはどうなるのでしょうか。最近システム・オン・チップという言葉がよく使われるようになりました。一つのLSIチップの上に言わばコンピュータ等機器の機能を載せてし

まうものです。今技術は、一万分の二ミリの微細加工で千万個以上のトランジスタを一チップ上に集積できる状況になってきました。

さらなる進歩に向けた技術開発の挑戦が行われていますが、課題は超微細な加工技術や生産装置開発に膨大な費用と労力を要することと、LSI上のシステム、回路、レイアウトの設計に膨大な工数を要することにあります。そこで最近ではメーカー間の協力開発体制が作られたり、設計専門メーカーや応用領域に必要な機能回路の開発販売業者等の分類形態も出現し、効率よく高度なLSIを実現し提供できる、いわばオープンシステムの半導体産業構造への産業界の変革が進むと考えられます。これによるLSIの高度化はさらなる時代の変化をもたらすこととでありましょう。

(沖電気工業(株)理事・技監)

東大工学部卒業後、NITT電気通信研究所に勤め永年LSI研究に没頭、その間米航空宇宙局(NASA)から勧誘を受けるほどの成果を上げて現職に至るが、今なお現役として精励を続けている。工学博士向井久和の名は斯界では世界的レベルにある。

二人の女性教師

68期 鈴木 俊彦

今日では女性の高校教師など別に珍しい存在ではないが、静中時代の昭和二十二年に着任された奥村ミサ先生は、静中静高史上初の女性教師ではないかと思う。次いで静岡城内高校と名称を変えた昭和二十四年に着任された多賀育子先生は、史上二人目の女性教師に違いない。

図らずも私は、このお二人の先生の授業を受けた世代である。戦前戦中の旧制中学時代なら到底考えられない人事なのだが、戦後間もなくの民主化の風を受けて、二人の女性教師は、いわば颯爽とわが校に着任され、新風を吹きこまれたのだ。

昭和二十四年は、史上初の女生徒の入学もあり、質実剛健を誇りとしていた校風にも新しい彩りが加わった年でもあった。

お二人の着任は、私個人にとつては極めて衝撃的な出来事であった。というのも、お二人は私の母親が静岡女子師範に奉職していたときの同僚の先生で、母とは極めて親しい間柄であったからだ。奥村先生は音楽の担当で、静女師から直接に着任され、多賀先生は英

語の担任で、県立高女（後の城北高）を経ての着任であった。

実は、私はかねてから、つまり幼児の頃から、お二人のことはよく見知っていたのである。それだけに異動の知らせを聞いたときに当世でいう「ウッソー、本当？」という気分。きまり悪さと恥ずかしさの入り交じった思いで、着任をお迎えしたのだった。

奥村先生は明治二十七年生まれ。上野の音楽学校の出身だけあって本格的な音楽教育を施して下さった。生意気盛りの中学生にクラシックの音楽の基本を辛抱強く教え込んで下さったのである。教科書以外にも、プリントを刷ってドイツやアメリカの歌曲を実に数多く教えて下さった。

奥村先生は、67期ではバイオリンの杉山光雄、テナーの前田一成、バリトンの大石岱介、バスの鈴木大八郎、68期ではピアノの秋野精也、鈴木秀弥、テナーの林明宏といった才能の持ち主を次々と発掘し育てあげて、市公会堂での演奏会のステージに送り込まれた。

あの薄暗い門内台の音楽教室で、窓から入る微光に眼鏡を光らせながら、生徒の才能をきちんと見定め、手塩にかけられたご努力

には敬服の他はない。

多賀先生は、津田塾仕込みのブラクティカルな授業をビッシン進められた。ヒヤリングやディクテーション（書き取り）を重視され、スピード感溢れる授業ぶりであった。赴任当時、奥村先生は五十三歳であったが、多賀先生は四十五歳の女盛り。色香のほどもまだまだ衰えをみせていなかった。

「みなさん方、一生懸命やらないからできないのよ。やればできるのよ」が多賀先生の口癖であった。色気のつき始めた悪童どもは、その台詞を嬉しがって、「やればできるのよ」と言い返す。妙な含み笑いが教室に漂り、たちまち哄笑に変わる。しかし多賀先生は、ここで顔など赤らめたらワルたちにつけ込まれるのは百も承知。毅然として、こう言い放たれた。

「そうそう、そんなのよ。やればできるのよ」

多賀先生の胸中に、さぞかしお辛いものがあつたらうと今にして思う。

あらぬ噂というものは、高校のキャンパスといえども独り歩きするもので、お二人が同性愛の間柄では？……との風評も流れてきた。お二人が以前から住まいを共

にされていたこと、控えて隠花植物のような奥村先生と華やかで顕花植物のような多賀先生との絶妙なコントラストが、そのような噂を生じさせたのだろうか。

奥村先生は昭和三十年まで八年間勤務され、七十七歳で逝去された。多賀先生は昭和三十三年まで勤務され、六十九歳で世を去られた。いずれも私の母が葬儀に出たので計報は東京にいる私のものにも届いた。

ご在職中は、いたく当惑していた私であるが、今は甘美な思い出に変わって、お二方の在りし日々を胸に甦らせている。

輝かしかつた新制度への試み 通年制HRと若衆組

69期 山本 龍男

昭和二十五年に新製の静岡高校へ入学した六十九期の私たちには旧制の静岡中学から高校へと進学された先輩たちが、いかにも大人びて見え、それはまぶしいほどだった。その「まぶしさ」を説明するキーワードがタイトルの二語のような気がする。

通年制HR（ホームルーム）は、昭和二十五、六年度の二年間だけ試みられた制度で、取り入れ

られたのは全国でも数校と聞いているから、私たちは貴重な体験をしたことになる。ホームルームは各学年の生徒から構成され、学校活動の文字通りのホームであり、そこから各自の授業に出かけ、それぞれのクラブ活動に励むことになっていった。ホームルームでの討論、昼食と食後の歓談、旅行など、その間に交わされた先輩たちとの会話のいくつかは、いまだに記憶に鮮やかである。十五、六歳のころの一年、二年の差は大きく、先輩たちの発する言葉や言動は、青春時代の指針となることさえあったほどである。

もうひとつのキーワード「若衆組」とは、大正時代まで西日本にあった南方系の習俗で「十八交わりを結ぶ健児の社」といわれた組織である。適齢になると入り、若衆頭の支配に属し、その組織の中で大人になるための教育をすべて受けたようだ。漁村なら海難救助の方法、山村なら山火事の消し方から肝だめし、ときには夜這いの手ほどきも、という具合だから、大げさに言えば、青年たちの行動様式、精神構造の日本的な祖型といってもよいだろう。

高校時代に年齢的にも地縁的にも最も近い先輩から人生の手ほど

きを受ける、しかもそれが知的な向上心に裏づけられていれば、極めて実りの多いものとなるはずである。静岡高校の通年制HRは、若衆組的な「協調性」だけではなく、個々の自主性を尊重し合った「独立性」が培われる理想的な場ではなかったか、少なくともその片鱗があつたのではと、今では遠くふり返っている次第……。

われわれの高校時代

70期 大高 源之丞

高校時代の思い出をさぐろうと、この間の日曜日、古いアルバムを整理をしていたら、すでに黄ばんではいるが、暮れなずむ「長谷のグラウンド」で、全校生が集ってファイアーストームでのお開きの万歳をしている写真が出て来た。

すでに夕日は沈んだあとで向うの空がうすぼんやり明るい程度なので、誰が誰やらは判らないが、この写真は創立七十五周年記念行事として色々な催し物が行われたなかのひとつとしての、仮装行列のフィナーレを飾るもので、当日の参加者として忘れることのできない一ページなのであった。

ここで敢えて「長谷のグラウンド」と言ったのは、われわれが入

学した頃の静岡高校は、校舎は駿府城内にあった旧歩兵34連隊の兵舎跡で、校名も県立静岡城内高等学校であった。長谷の旧静岡中学の敷地は、新校舎を建設するための準備中であり、体育の授業だけが長谷のグラウンドを使っていたのである。

二年生になった時、二棟のうちの一棟が完成したため、二棟目の完成を待たないで二年生と三年生だけが新校舎へ引っ越しをした。その時は、予算がなかったせいも各自が自分の机(当時は一人一人の机が椅子とセットになっていた)を持って、蟻の行列のように城内校舎から長谷校舎まで、クラス別に時間差をつけ、二列か三列になってぞろぞろと歩いて進んだものである。

そのあと一年生は城内校舎に残っていたし、物理や化学などの実験を伴う授業は城内校舎で、両方に行ったり来たりした記憶が残っている。

ところで前置きが長くなったが、仮装行列についてである。仮装行列は一年生から三年生までのクラス別対抗のコンテスト方式で、その出し物は本番スタートまでマル秘である。われわれ三年五組(35ホームルーム)は「世界アベ

ック絵巻」というテーマで、トルコ・スペイン・ハワイ・アラビアなどのブラカートをたて、それぞれの地域の民族衣装をまとい、厚化粧をし、腕を組んだアベック(もちろん二人とも男)が行列の途中で抱き合ったりキスしたりでじゃれ合いながら行進するものである。アラビア娘になった某君などは、シーツを腰に巻いてロングスカートを替りとしたまではよかったが、行進中に誰かに裾をふまされて、ロングスカートのすっぽり脱げてしまったことも、観衆の大笑いを誘ったものであった。

行列は長谷通りから浅間神社前を通り、追手町まで一五〇〇米もの長さになった。県庁前から左折し内濠沿いに進み、二時間をかけて再び校舎に戻ったが、当時は市内の幹線道路も今のように自動車の交通もはげしくなく、交通整理のお巡りさんも、道路の両側につめかけた観衆と一しよに楽しんでいる様子であった。

夕暮れ近くグラウンドに戻った行列は、生徒代表で構成した大会実行委員会の審査を受けたはずであるが、残念ながら、どこのクラスが優勝したのか、表彰されたのかまったく記憶がないのである。わが35ホームが入賞しなかった

ことだけは間違いのない事実である。そのせいというわけではないが最後の校歌合唱を、力一ぱい大きな声で歌ったことは、はっきり覚えていいる。

県立静岡城内高等学校が、県立

静岡高等学校に改められたのはこの行事の直前であった。われわれが高校三年生の秋は、昭和二十八年(一九九三年)で、今から四十余年も以前のことなのである。

斜塔の町 イタリア・ピサ

60期 磯 西 昭

フィレンツェを飛び立ったヘリコプターは、西に流れるアルノ川の河口に近い「斜塔」で知られる町、ピサに向かった。二十分ほどで丘陵地帯を過ぎると、展望が開け麦畑のかなたに、傾いた塔がかげろうにゆらいだ。

大きく旋回をする。緩やかに蛇行する川を挟んだ町の外れに、歴史的なモニュメントのほとんどが集まっていた。

目指す斜塔は、旧市街の北側、城壁に沿った広場にあった。壮麗な白亜の大聖堂、八面体のかわい丸屋根を載せた洗礼堂、長方形の大きな白い回廊をめぐる墓所(カンポサント)のいずれもが緑を背景にゆったりと配置されている。

円筒状の鐘楼は想像以上に傾いていた。上空からは、華麗な象牙細工にも見え、手で押せば今にも

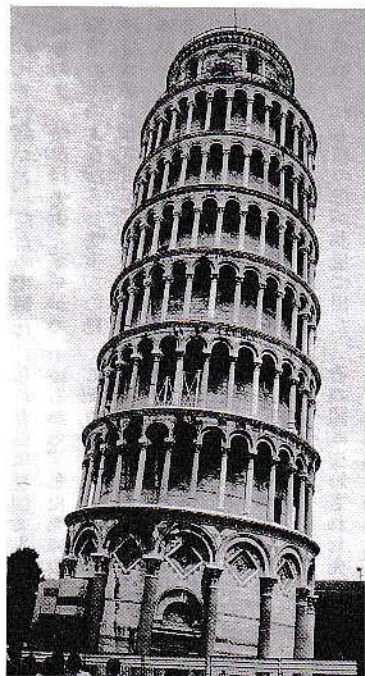
倒れそう。八百年の風雪に耐えた建物の周辺に、観光の人垣を散見する。広々している芝生に、初夏の陽光を浴びて昼寝を楽しむ人やボールけりをする子供たちがいた。旧市街一帯は中央駅に近いスビーナ教会のせん塔装飾が目についた以外は、赤い瓦の平凡な家並みが広がっていた。個性的な都市の多いイタリアでは珍らしく表情の少ない穏やかな街だ。

機首を河口の港に向けた。ローマ時代から十三世紀まで海上勢力を誇り、ばく大な富をもたらした当時の面影は見られなかった。

ヘリコプターを降り、観光客でにぎわうセント・マリア門から入る。斜塔を両手で支えるようなポーズで記念写真に興じている若者たちがいた。

鐘楼の前は、相変らずの人だかりだが金網に囲まれ入れない。傾きの進行を止める工事は、今年完了と聞いたが、入り口左側は長方形の鐘を幾重にも積み上げ、倒壊を食い止めていた。二十年ほど前塔に登ったとき、床の大理石はつるつるなのに、手すりもなく滑り落ちそうで冷汗をかいた覚えがある。

大聖堂の正面は、鐘楼と同じく数多くの柱で馬蹄形のアーチが



飾られ、外壁は白と緑の大理石、
ピサの様式は華やかだ。

午後の陽が差すと、列柱の影が
白壁に模様を描き、美しさを増し
た。堂内、説教壇の隣に大きなつ
りランプがある。ガリレオが「振
り子の法則」発見のヒントを得た
といわれるランプだ。異説もある
がピサの生んだ科学者の逸話とし
て面白い。

円形の洗礼堂に入ると聖歌が聞
こえ、さまざまな和音が響いた。
観光客のコースだが、残響が豊
かで心地よかった。

斜塔の南隣に美術館がある。こ
この中庭から見上げる鐘楼は、建
物の傾きが迫るように感じられ
る。

イタリアの建築、彫刻の歴史に
石材は重要な役割を占めてきた。
ピサに近く、古くから白大理石の
露天堀りで知られるカッラーラの
町を訪ねた。山肌の遠望は雪山の
ようにまぶしく見える。市の大理
石課スガド氏の案内で数カ所の石
切り場に入る。昔、ミケランジェ
ロが採石した現場は数十mの白壁
が切り立ち、深い谷底では大型シ
ョベルカーが搬出に唸りを上げて
いた。昨年、国内産出量七百二十
五万トンの四割が、カッラーラ産
という。

第50回 江の島会開かれる

残暑が戻った九月七日、江の島
会が永野清名誉会長（35期）が経
営される恵比寿屋で、岳南健児女
五十名が参加して開催された。

まず総会が奥沢徹氏（59期）の
司会で始まった。今年は五十回の
記念すべき会合であるので、記念
品として校歌の唐紅の色に校章を
あしらったスカーフと、永野名誉
会長に伺った江の島会由来をお配
りし、所用で欠席された関東同窓
会長大石巖氏（53期）のメッセー
ジが報告された。

佐伯正剛会長（51期）が、大勢
の参加者があったこと、母校校
長、同窓会長の来駕にたいしての
お礼を述べられた。そして五十回
は一つの通過点であり、この会が
ますます発展するようお願いした
い。五十回を迎えることができた
のは、故村松直氏（42期）の努力と
奥沢幹事の陰の苦労によるところ
が大きいと思う。最後に永野名誉
会長がますますご長寿であられ
るよう祈念したいと挨拶された。

続いて川村春雄同窓会長（46期）
から、平成十五年に創立百二十五
周年を迎えるが、記念誌を発刊す
る予定なので、資料提供等の協力

をお願いしたい。さらに歴史資料
館を建設したいという構想もある
と話された。

又、長沢靖夫母校校長が静高生
は反社会的行動をとるものはいな
い。又、女子生徒が40%を超えた
のでこれからは男女共生時代の教
育を考えなくてはならない。野球
等部活動はなかなか期待に応えら
れず残念に思っていると話され
た。

続いて関西同窓会を代表して志
田清氏（53期）から心暖まるご祝
辞をいただいた。

その後佐伯会長を議長に議事に
入り、奥沢幹事からの事業報告、
会計報告があり、監査報告とも
に一同これを承認した。

また、奥沢幹事から五十回を記
念してパンフレットの作成を計画
しているの、五十回の歩みで、
これはと思う出来ごとなどを幹事
までお知らせいただきたいとの協
力要請があった。

続いて記念撮影、そして成岡英
彦氏（67期）の指揮のもと校歌を
四番まで斉唱し、西沢純三氏（43
期）の音頭による乾杯で懇親会に
入った。

同期生同士または数期にまたが
つての歓談の輪があらこちらで
みられ、互いに打ち解けた親近感
を抱いた和やかな光景が広がって
いった。まさに

江の島会の特色
であるモットー
「明るく楽し
く」の光景であ
った。

今回の出色
は、津軽三味線
の演奏を荒井千
明夫妻（90期）が
されたことであ
った。息のあつ
たご夫妻の、素
朴で勇壮な津軽
三味線の音色に
一同聞き惚れ
た。

宴も終りに近
づき一応の散会
となったが、弁
天橋の屋台「い
そみ」で相模湾
に夕日が沈むの
を見ながらの二
次会が暗くなる
まで続いた。
今年参加出来
なかった諸兄姉

は、ぜひ来年の江の島会（九月第
一日曜日）にご参加下さるようお
願います。

（68期 雨宮明生）



「こえ」

この欄は「もう一つの総会」です。
気軽に筆を執り、送ってください。

55 山本 孫一

転居しました。

三月に会社生活全完了し、ソフ
トランディングしました。既にテ
ニス、水泳等無理せず老年健康管
理にいそしんでいます。孫は四人
悠らしや大陸？は伸び伸びして、
やり方次第で結構極楽です。

70 久沢 正雄

第五十回「江の島会」に恐る恐
る初参加してみました。総会、同
期会とはまた違った趣、雰囲気で
大へん楽しいひとときを過ごさせ
ていただきました。皆さんも一度
いらしてみたら如何？

56 伊東 卓爾

年会費をもっと早く納入するつ
もりでいたのですが、病気で入院
してしまいました。果して、今ご
ろ納めてよいかと考えましたが、
病気の方は完治はしませんが小康
を得ています。同窓会のお世話、
感謝しています。よろしく。

70 牧野 甫

定年退職後は東京静岡行ったり
来たりの日々を送っております。
この二月で定年を迎えました。
同期の皆様によろしく、しばらく
同じ日野自動車工業で仕事を続け
ます。

71 大井 康生

昨年三月でサラリーマン生活を
やめ、現在元氣にやっています。
平成九年三月三十一日付で(社)
中高年齢者雇用福祉協会を退職い
たしました。

59 水野 哲也

66 大坪 信之
96年と97年分会費と一緒に送ら
せていただきます。
三十年勤めた東京銀行を一応卒
業し、合併を機に東銀の創りまし
た(財)国際通貨研究所に移り、専
務理事をしております。
〒103中央区日本橋本町一―一二
電〇三―三二四五―九二〇四

75 篠原 興

60 下山 茂
定年のない植木職人になり、今
三年生をやっています。本年四月

77 仁科 光司

同窓会報「静岡の美しい店」

68 仁科 将

楽しく読みました。岩久、天文、
寿司鉄程度しか知らなかった昔を
思い出します。実家も東京に転居
し両親も今は亡く、静岡への機会
がめっきり減っている時、「おい
しい店」はその気にさせてくれま
す。乞続編。

60 下山 茂

77 仁科 光司

92 清水 篤

◎事務局より

私がまだ大学在学中の頃、新聞
部OBとして「印校新聞」縮刷版
PART2を作製するの、当時
の宮沢会長はじめ皆様に大変お世
話になりました。最近、静岡市内
古書店で「一九四五年―一九六八
年」縮刷版と再会しました。これ
も旧事を調べるのに大変貴重な物
となっています。卒業して二十一
年、最近静岡の事が気になってい
ます。

同封の振込用紙で、ぜひぜひご
協力ください。なお用紙は会報の
毎号に年会費の納入済み、未納に
かわらず同封しておりますこと
ご諒承ください。

◎各期幹事諸兄姉のご尽力で同窓
会を開催し、その報告を会報にど
しどしご寄稿ください。

◎宛先不明のため、会報返送が毎
号多数あります。住所変更の場合
至急ご一報のほど願ひあげます。

◎事務局へのご連絡は：
〒153 目黒区上目黒2―18―13
山中ビル タカラ歯科医院内
静中・静岡関東同窓会
薬科名雄(87期)
(電)〇三―三七九二―三三八〇
(午後2時〜6時の間)

「会報」編集子よりお願い
〇毎号バラエティに富んだ原稿を
寄せてくださる方々に、心から感
謝申しあげます。

〇同窓会員の絆をより強くとの願
いをこめて、さらにより充実した
誌面になるよう、一層のご協力を
お願いいたします。

〇原稿尊重を建て前としておりま
すが、加筆や訂正させていただく
場合もあります。その点ご了承く
ださい。

〇提供の写真について、返却の必
要があるかどうか書き添えていた
だければ幸いです。

〇原稿依頼や掲載広告について、
候補と思われる方を事務局までお
知らせくださいますようお願いし
ます。

(U)

十二月に、『医者の責任・患者の
責任』価五六〇円(集英社文庫)を
発刊。「病んでからでは遅い」
日常生活にひそむ病の原因に迫る
臨床医の書」ひとつよろしく。

90 荒井 千明

84 平井 みや子

83 藤原 慎二

84 平井 みや子

83 藤原 慎二

84 平井 みや子

83 藤原 慎二

84 平井 みや子

83 藤原 慎二

84 平井 みや子

83 藤原 慎二

84 平井 みや子

83 藤原 慎二

84 平井 みや子

83 藤原 慎二

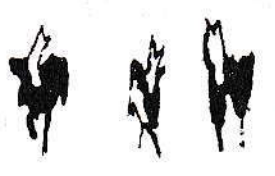
84 平井 みや子

83 藤原 慎二

84 平井 みや子

83 藤原 慎二

84 平井 みや子



鈴 与 株 式 会 社

取締役社長 鈴 木 通 弘 (76期)

清 水 市 入 船 町 11-1

TEL 0543(54) 3 0 1 5 (秘書課)

東京支店 〒105 東京都港区芝公園1-2-12

TEL 03 (3432) 7 1 9 2

新日本証券

相 談 役 大 石 巖 (53期)

専務取締役 海 野 幸 雄 (71期)

本店/〒101 東京都千代田区神田駿河台3-11

☎03(3219)1111

建築コンサルタント・設計施行业務

建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大 雄

取締役社長 奥 野 孝 (53期)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階

TEL 03-3834-5331 (代表)

建築設計・監理

奥野建築設計事務所

取締役会長 奥 野 孝 (53期)

取締役社長 奥 野 進 (56期)

取締役副社長 奥 野 広 (58期)

本 社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル

Tel 03-3842-6831 (代表)

静岡事務所 静岡市安東2-8-14

Tel 054-246-9378

日本レーベル印刷

代表取締役 岩 井 平 一 郎 (57期)

本 社 静岡市国吉田3丁目1番1号

TEL 054(262) 1 1 1 1 (代)

東 京 中央区京橋1-1-6越前屋ビル8F

TEL 03(3272) 4 6 5 1 (代)

自動車・電機部品の自動塗装及びシルクスクリーン印刷

勝山塗装工業所

代表取締役 奥 澤 徹 (59期)

本 社 横浜市瀬谷区橋戸3-25-6 〒246

Tel 045-301-5545 FAX 045-301-5547

大和工場 大和市深見3706-1 〒242

Tel 0462-62-0340 FAX 0462-62-0343

東松山工場 東松山市大字新郷88-47 〒355

Tel 0493-24-2511 FAX 0493-24-2513

株式会社 富 士 越 株式会社 富士越化成

代表取締役 野 澤 正 憲 (64期)

東京都渋谷区東2-14-9

TEL (3409) 3 3 4 2 (代)

TEL (3400) 9 5 4 1 (代)

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック
ねつ かん

熱 函 病 院

院 長 小 坂 博 (67期)

住所 熱海市春日町12-2

TEL 0557-83-3131

総合広告代理店

株式会社 ア ド プ ロ

代表取締役 朝比奈 正 三 (67期)

東京都千代田区内神田3-4-5 岡崎ビル3階

TEL 03-3254-2171 (代表)

☎ 昼2時より夜11時まで診療 ☎

タカラ歯科診療所

代 表 ^{ワラ} ^{シタ} 藁 科 名 雄 (87期)

東横線 中目黒下車徒歩5分

TEL 0120-376480